

医芸歌壇



00年代

東京 小松安彦

木星をタベ眺めて振り向けば東の空に昇る満月

「木星」を聴きて迎へる元日の月食までは起きてあられず
冬の星月と火星の光をりゼロ年代の終りたる夜に

バレリーナの後ろに映る絵画をば今一度見る機会のあれな
「ラデッキー行進曲」を聴きながらウィーンの街を回想しをり

九十二歳 神奈川 助川信彦

一白水星九十二歳何事も天命として受け入れ生きむ

青空に白雲一片動かざる元日にして物の音なし

ひそかなる老人ホームの一室にこもりて賀状の返信を書く
未亡人が子の就職を告げくるに故人の喜びさこそとするす

慢性の心臓病にて双足に地腫れあり天命としても嬉しくあらず

大腿骨折 神奈川 武井忠夫

走り抜けし自転車避けんと道の端に自転車ごと倒れこみたる

片手杖で支え来し脚強打してし線に著るき骨折の徴

大腿の骨折なりし人事と聞き流せる身の計らざる難

八十余年の生涯にして験しなく入院ベッドに新春迎つ

心鎮めて讀書・音楽に**対**わばや**つ**希いはしなまかなえられたる

母のかげ

青森 朝霧朝光

むらくもに初日はみえずあしたには光の見ゆるや国のゆくえも

立ち止まりしつかり眺む釜臥山の傍へに燃ゆる夕やけ空に

胸ふかく思いをひとつまたひとつ畑にこぼして今日の風すがし
生かされて生きている生をどう生きるつれづれに思つ臥す正月に

風の匂ひ水の匂ひをかぎて佇つ里の木橋に母のかげあり

瀧江下り(桂林)

千葉 蒲谷玲子

あこがれし桂林の山の連なりを今こゝに見む言葉は要らさず

中国人のツアー客らも乗り合いて何処も同じ観光地なる

瀧江のほとり少数民族住むという川辺に牛を洗つ男あり

桃源郷と名乗る公園入口に時ならぬ桃の造花咲き満つ

果てもなく瀧江の流れゆく彼方山の端よりあかき虹の立つ見ゆ

サンフランシスコ

東京 初芝 澄雄

二年振り左手に見ゆる湾望みジャンボ機は軽くシスコの街に
静々とケーブルカーは上りゆく坂の街路に懐かしく立つ
青き海フェリー進みぬ波高くサウサリートの岸を直指して
子と孫とコイトタワーに共に立ちシスコの町を飽かず見下す
波濤分け進む航跡負つがことカモメ群れ飛ぶシスコの湾に

グランドゴルフ

茨城 羽生 藤伍

百回鳴るグランドゴルフの間中湖畔の杭に一羽動かず
グランドの芝につねりの筋あるは土音に非ず風跡なりと
コースにグランドゴルフ体育会を女も楽しむ毎日のこと
西風吹けば波立ち騒ぎ東風吹けど湖穩やかは流れの故か
電ヶ浦南の岸に風が湧きて廢墟の町も活性化せり

鉄工場寸詠

東京 林 宏匡

幅広き鋼板落す音ひびく工場内の人の小さき
赤々と焔ほに染まる鋼鉄に顔ほてらせて眼を凝らすなり
鉄工場熱暑騒音交々のなかに疲労の速度増すらむ
一時間ごと交代に凝視するのみの仕事の辛さを想ふ
工場内火気厳禁の表示ある休憩室に灰皿のひとつ

フランソア

東京 横田 英夫

夕暮るる四条小橋の「フランソア」わが青春の思い出の店
戦前の面影残る「フランソア」音楽喫茶のその前に立つ
白壁の昔のままのただずまい七十年経てドア押して見る
店内は広く明るくリニューアル若き女性の憩の場とぞ
目を閉じて「新世界」等聞きいたる弊衣破帽の若き日懐か

次は春季号 締め切り 3月26日(金)

医家随想 今年の冬は冷えますね 新年度第1号を
春らしい楽しい随想や紀行文などを期待しています。

医芸俳壇・歌壇・柳壇もお忘れなく。

評論 新政権の医療問題への取り組みについての注
文や希望、新型インフル問題などご意見があれば。

ご注意 規定を超える原稿量やカラー写真には、相
応の負担金を請求させていただきます。

前号(文芸特集号)の訂正 小南先生原稿と紹

介記事 本文65頁 下段4行目 永六助氏 永六輔氏

執筆者一覧 お名前の下 併号 丁子 丁字 同専

門科目 (口腔外科 補綴・歯科技工)